

提案論文 1

対人関係能力の低下といじめ

名古屋市立浦里小学校 三 島 浩 路

1 はじめに

親密で排他的なインフォーマル集団に所属している子どもが同じインフォーマル集団に所属している仲間からいじめられることがある。親密で排他的なインフォーマル集団内で起きる「いじめ」は、解消することが難しいばかりか、発見することすら容易ではない。以上のことから、インフォーマル集団内での「いじめ」(「集団内いじめ」)は、深刻な「いじめ」といえよう。このような「いじめ」は、小学校高学年の女子に多く見られる「いじめ」でもある。「集団内いじめ」が起きる背景を、子どもたちの対人関係能力という視点から考えてみたい。

2 「集団内いじめ」の特徴

(1) 攻撃行動の特徴

大淵(1993)は、攻撃行動を「他者に危害を加えようとする意図的行動」と定義している。「集団内いじめ」における攻撃行動の特徴をとらえる上で、「他者」との関係を考えることが重要である。

「たたく・ける・隠す」などの攻撃行動は、攻撃する者とされる者との関係にかかわらず、攻撃される者に一定のダメージを与える。このような攻撃行動を「直接的な攻撃行動」とする。それに対して、「にらむ・ひそひそ話をする」などといった攻撃行動は、攻撃する者とされる者との関係により、攻撃される者の受けるダメージが大きく異なる。このような攻撃行動を「関係を利用した攻撃行動」とする。「関係を利用した攻撃行動」の特徴として、攻撃をする者とされる者との関係が親密なほど、攻撃される者が受けるダメージは大きいということがある。例えば、親しくない相手ににらまれた場合に比べ、親しい相手ににらまれた場合の方が、にらまれた者が受けるダメージは大きい。また、「関係を利用した攻撃行動」は、言い逃れがしやすいという特徴もある。相手をたたいたにもかかわらず、「たたいていない」と言い逃れすることに比べ、相手をにらんでいながら、「にらんではいない。顔を見ただけ。」と逃げ逃れする方が、言い逃れの言葉に真実味がある。さらに、攻撃を加えたい相手の近くで、「ひそひそ話をする」という「関係を利用した攻撃行動」は、「たたく・ける・隠す」といった「直接的な攻撃行動」に比べ、その行動が攻撃行動なのかどうかを判断することすら難しい。

「集団内いじめ」でみられる攻撃行動の多くは、その行動が攻撃行動なのかどうかを判断することすら難しい「関係を利用した攻撃行動」である。また、インフォーマル集団内でなされる「直接的な攻撃行動」は、親しい友達同士の遊びというかたちに偽装されることが多い。そのため、インフォーマル集団外の者が「いじめ」の発生の有無を判断することは難しい。「集団内いじめ」における攻撃行動の特徴として、インフォーマル集団外の者に対する隠蔽性の高さをあげることができる。

(2) 集団の特徴

「集団内いじめ」は、小学校高学年の女子に多くみられる「いじめ」である。小学校高学年の女子に限らず、高親密性・高排他性という特徴をもったインフォーマル集団があれば、そこに「集団内いじめ」が起きる可能性は高い。そこで、小学校高学年の女子のインフォーマル集団の特徴から、「集団内いじめ」が起きる集団の特徴を考えてみる。

山中(1994)は、大学生を対象にした調査から、対人関係の親密化の過程は、関係性の初期分化現象を示すと結論している。小学生のインフォーマル集団形成過程においても、互いに十分知り合ってから集団を形成するのではなく、まず、インフォーマル集団を形成し、その後、相互理解を深めていくというかたちでインフォーマル集団成員相互の親密化が進行していくようである。

学級編成直後、自分の周りの子どもが次々とインフォーマル集団を形成していくのをみた子どもは、どこかのインフォーマル集団に自分も早く所属しないと、学級内で孤立してしまうという不安をつのらせる。この不安は、インフォーマル集団に所属した後、自分が所属している集団から排斥されれば、他のインフォーマル集団に入ることは難しいという不安となる。そして、この不安が、インフォーマル集団の外に子どもたちが出ることを抑制する。さらに、こうした不安を低減するために、自分たちがインフォーマル集団を形成しているのだということを集団の内外に示す必要がある。そこで、集団成員が同じ文房具を持ったり、交換日記をしたりすることによって、インフォーマル集団のつながりを絶えず確かめ合う。また、インフォーマル集団外の者に対して排他的に振る舞うことにより、集団のバウンダリーを明確化し、インフォーマル集団の存在を示す。こうして高親密性・高排他性という特徴をもったインフォーマル集団が誕生する。

学級内の多くのインフォーマル集団の排他性が高いということは、自分が所属している集団を排斥された場合、孤立化する可能性が極めて高いということを意味している。従って、学級内の多くのインフォーマル集団が親密性・排他性を高めて行けば、インフォーマル集団から排斥されることへの不安はますます高まり、こうした不安の高まりが集団の親密性・排他性をさらに高めていくという循環を形成する。

インフォーマル集団内でいじめられている子どもは、集団外に出ることにより、「いじめ」を解消することが可能である。しかし、学級内の多くのインフォーマル集団が高親密性・高排他性という特徴を備えてしまった段階で、自分が所属する集団の外に出ることは、学級内で孤立することであり、学校生活の多くの時間を独りぼっちで過ごさなくてはならないことを意味する。学校生活の多くの時間を独りぼっちで過ごすことは孤独を感じることであり、こうした孤独感は、不快であり苦痛を伴うものである(Peplau, L. A., & Perlman, D. 1982)。「いじめ」から受ける苦痛と、孤立から生じる苦痛を比較した場合、「いじめ」から受ける苦痛が解消される可能性に比べ、孤立から生じる苦痛が解消される可能性は低い。(学級内のインフォーマル集団は、親密性・排他性を高める方向へ変化しているから。)こうしたことから、インフォーマル集団内でいじめられている子どもは、集団の外に出ようとせず、いじめに耐えて集団に残ることを選ぶのではないだろうか。

別の見方として、インフォーマル集団内でいじめられている子どもは、自分が受けている「いじめ」を解消する手段として、集団の外に出るという戦略自体をもっていない可能性もある。高親密性・高排他性という特徴をもったインフォーマル集団に所属している子どもにとって、インフォーマル集団は、生活時間のほとんどすべてを過ごす集団であり、そうした集団の存在を抜きにした生活など考えられない。このような子どもにとっては、自分が所属しているインフォーマル集団の外に出ることなど想像もつかないことであるかもしれない。

以上のことから、高親密性・高排他性という特徴を学級内の多くのインフォーマル集団が備えることにより、「集団内いじめ」が起きる土壌ができていく。

ところで、男子に比べて女子のインフォーマル集団の方が排他性・親密性が共に高いという指摘は、これまで多くなされている(河井 1985, 久保 1993, Feshbach, N., & Sones, G. 1971, Winstead, B. A. 1986)。三島(1995)は、子どもたちが互い呼び合う呼び方が、インフォーマル集団のバウンダリーの高低を示す一つの指標になると考え、小学生を対象にインフォーマル集団内外での子どもたちの呼ばれ方に変化があるのかどうかを調査した。調査結果を男女別に集計したところ、インフォーマル集団内外で呼ばれ方が変わった男子は男子全体の約12%であったのに対し、女子では約34%の者の呼ばれ方が集団の内外で変わった。名前を呼ぶという行為は、日常生活の中で繰り返し行われる行為である。

インフォーマル集団内の者は呼び捨てにするが、集団外の者は「さん」・「くん」などを付けて呼ぶということは、名前を呼んだり呼ばれたりする当人同士だけではなく、周りの者に対しても、名前を呼ぶ者と呼ばれる者が同じインフォーマル集団に所属しているのかどうかを知らせることになる。このように、インフォーマル集団内外の者に対する呼び方の違いという一つの指標からも、女子のインフォーマル集団のバウンダリーが男子の集団に比べて高いことが分かる。

明確なバウンダリーによって仕切られ、高親密性・高排他性という特徴をもった小学校高学年の女子のインフォーマル集団の中で、子どもたちは何を考えているのだろうか。三島（1994）は、「友達が自分のことをどう思っているのか気になる」程度を、小学生・中学生・高校生を対象に調査しそれぞれ男女別に集計した。その結果、友達のことが気になる程度は、小学生から高校生まで女子は一貫して高く、小学生段階においては、男女の差が極めて大きいことが分かった（図-1）。

明確なバウンダリーによって集団外から仕切られたインフォーマル集団の小さな世界の中、集団の仲間から自分がどう思われているのかを強く意識しながら生活する小学校高学年の女子の姿が二つの調査結果からも浮かび上がってくる。小学校高学年の女子のインフォーマル集団のこのような特徴は、「集団内いじめ」が起きる集団の特徴ともいえよう。

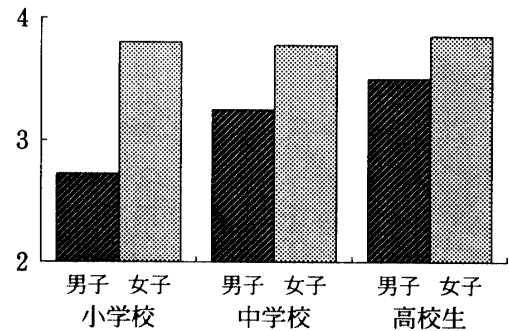


図-1 友達が自分のことをどう思っているのか気になる程度
「友達・親友の人数を規定する要因についての報告」(三島 1994)より

(3) 「集団内いじめ」の生成と進行

「集団内いじめ」をしている子どもに、なぜいじめめるのかを尋ねると様々な答えが返ってくる。しかし、そうした答えには、「いじめられる子どもには、それ相当の理由がある」という共通点がある。「仲間と一緒に遊んでいるとき、いばる」・「約束を破る」・「友達を独占しようとする」などという理由は、いじめめる側の子どもがよく言う理由である。いじめめる側の子どもは、こうした“問題行動”を改めさせるために攻撃するのだと言う。

確かに、いじめめる側の子どもが主張する原因が、「いじめ」を開始する切っ掛けになった可能性は否定できない。しかし、インフォーマル集団内の一人の子どもの行動を、周りの子どもたちが問題だと考え、その“問題行動”を改めさせようとするなら、「いじめ」という方法以外にも手だてはある。また、いじめの原因となる出来事は、「いじめ」が起きる数ヶ月前、場合によっては数年前の出来事であることすらあり、いじめめる側の子どもが、自分たちが行っている「いじめ」の理由として挙げたいじめられる側の子どもの“問題行動”は、「集団内いじめ」が行われはじめてから数ヶ月が過ぎた時点ですでに解消していることが多い。そのため、「集団内いじめ」の原因が、いじめられる側の子どもの“問題行動”だとは考えにくい。

そこで、A児・B児・C児の3人から成るインフォーマル集団における「集団内いじめ」の進行を例にして、「集団内いじめ」の原因について考えてみたい（図-2）。A児は「勉強が面白くない」・「塾通いが忙しい」などという漠然とした不満をもっていた。しかしA児は、自分もつ不満の原因が漠然としてはっきりしない。そんなとき、同じインフォーマル集団に所属しているB児が、約束を破った。B児が約束を破ったことに腹を立てたA児とC児は、電話でB児のことをいろいろと話し合った。これまで、自分たち二人に対して命令するような口調でB児がよく話をしたことや、B児が以前にも約束を破ったことがあることなど、B児が行った“問題行動”が次々に話題となった。こうした電話を何度かするうちに、A児とC児は、自分もつ不満の原因はB児の“問題行動”にあるのだという暗黙の合

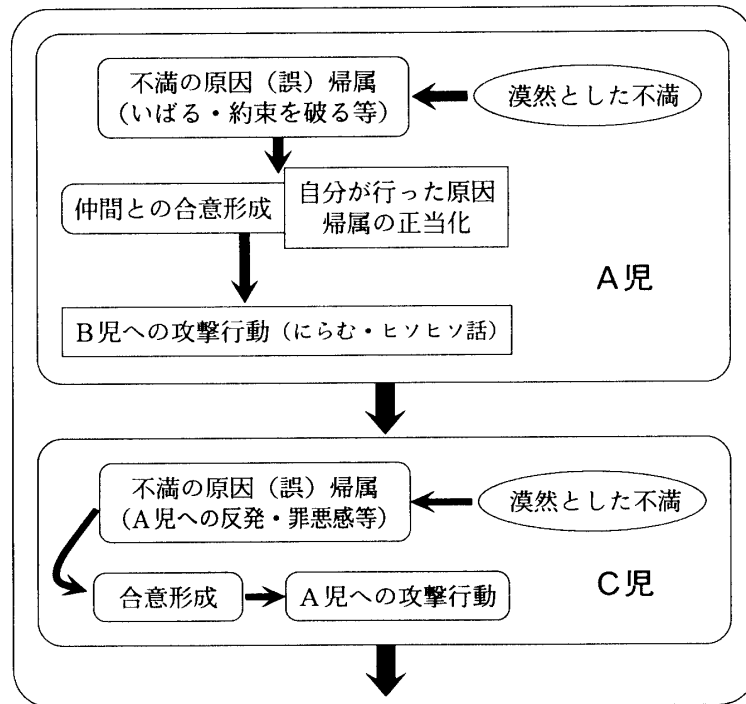


図-2 「集団内いじめ」の生成と進行

意を得た。A児は、自分が感じている漠然とした不満の原因をB児の行動に(誤)帰属した。そして、C児という仲間も、自分と同じようにB児の行動を問題視しているのだということが確かめられたことにより、A児は、自分が行った原因帰属を正当化することができた。「B児の良くないところを改めさせる」という目的をもったA児とC児は、B児に対して、「にらむ・無視をする」という「関係を利用した攻撃行動」を開始した。

しかし、B児に攻撃を加えても、A児やC児の漠然とした不満が解消するはずはない。自分が感じている漠然とした不満の原因はB児にあるのではなく、B児に対する攻撃行動を仕向けたA児にあるのではないだろうか。C児は考えるようになった。そして今度は、C児とB児がA児の「問題行動」を話し合うようになった。この話し合いにより、A児の行動を問題視しているのは自分だけではなく、同じようにB児も問題視しているのだということを確認したC児は、自分が行った原因帰属を正当化する。こうして、C児とB児は、A児に対して攻撃を開始した。

「集団内いじめ」では、いじめの子といじめられる子が集団内で順々に変わっていく。そのため、インフォーマル集団内の子どもたちは、自分が集団の仲間からいついじめられるのか分からないという不安をつのらせる。この不安が、インフォーマル集団の仲間が自分のことをどう思っているのかを絶えず気にしていなくてはならないという気持ちとなって現れるのではないだろうか(図-1)。

3 「集団内いじめ」と対人関係能力

「集団内いじめ」が起きる背景には、インフォーマル集団間の子どもの交流が少なく、インフォーマル集団間の成員の流動性が低いことが挙げられる。これは、インフォーマル集団を新たにつくったり、インフォーマル集団に新しい仲間を迎え入れたりすることが少ないということである。インフォーマル集団を新たにつくったり、インフォーマル集団に新しい仲間を迎え入れたりすることを個人レベルで言い換えれば、「友達をつくる」ことである。インフォーマル集団間の成員の流動性の低さは、「友達をつくる力」の弱さと言い換えることができる。また、いじめられる子どもが集団内で順々に変わっていくという「集団内いじめ」の特徴は、子どもたちが、自分たちのインフォーマル集団内で起きた問題を解

決することができないことの現れである。

子どもたちが感じる漠然とした不満の原因を、インフォーマル集団のある成員の“問題行動”に（誤）帰属したとしても、そうした“問題行動”を改めさせる方法を考え出すことができれば、「集団内いじめ」は起こらない。また、「集団内いじめ」が起きたとしても、「いじめ」という言葉でくくられる一つ一つの攻撃行動が何のためになされ、自分たちが行っている攻撃行動は、その目的を達成することができたのかどうかを冷静に考えることができれば、「集団内いじめ」が長く続くことはない。

インフォーマル集団の成員の“問題行動”を解消したり、集団内のもめ事を自分たちの力で解決したりする「もめ事解決力」が集団の成員に十分に備わっていれば、「集団内いじめ」が起きることは少ない。しかし、多くの小学校では、現実に「集団内いじめ」が起きている。これは、インフォーマル集団内で起きる様々なもめ事を解決する「もめ事解決力」を、子どもたちの多くが備えていないことの現れと考えられる。

「友達をつくる力」を弱める背景は何か。「もめ事解決力」が高まらない背景は何か。こうした二つの対人関係能力を形成する過程と子どもたちがおかれている環境との関連を考えることによって、「友達をつくる力」や「もめ事解決力」の高まりを抑制する要因を明らかにしたい。

(1) 「友達をつくる力」の低下

ア 友達をつくる機会の減少

ア) 学校規模の縮小

小学生の多くは、同じ学級に所属する同性の子どもと友達になる。子どもたちが友達をつくる一番大きな切っ掛けは、年度替わりの4月に行われる学級編成である。一つの学年に学級が5つある学校を例にして考えてみよう。年度が替わり、学級編成が行われた後、昨年度同じ学級だった子どもは、新しい学級全体の人数の約5分の1しかいない。そのため、一つのインフォーマル集団を昨年度形成していた仲間が、この中にすべて含まれる可能性は低い。そこで、年度替わりの4月、子どもたちは新たなインフォーマル集団をつくる。ところが、一つの学年に学級が二つしか存在しない場合、4月の学級編成後、新学級を構成する子どもの約半数は、昨年度同じ学級に所属していた子どもである。そのため、子どもたちが昨年度つくったインフォーマル集団の多くは、わずかな成員の出入りだけで維持される可能性が高い。

名古屋市には、1学年に二つしか学級がない学校も少なくない。中には1学年1学級の学校もある。こうした傾向は名古屋市特有のものではなく、全国的に大規模校は減りつつある。大規模校の解消は、子どもたちの学習環境を改善した。しかし、大規模校の解消が、子どもたちが友達をつくる機会を減少させた可能性があることも否定できない。

イ) インフォーマル集団をもとにしたグループづくり

遠足や社会見学に出掛けたり、理科の実験を行ったりするとき、担任は子どもたちにグループをつくらせる。遠足や社会見学に子どもたちが楽しく参加できるだろうという教師の期待や、子どもたちの希望から、遠足や社会見学のグループは、子どもたちが日ごろから仲良くしている仲間同士を同じグループにすることが多い。また、理科の実験においても、ソシオメトリックな関係を考慮してグループ編成をした場合は、そうでない場合に比べて、学習におけるパフォーマンスが高まる（遠西・伊藤・円谷・高橋 1983）という調査結果があるように、日ごろから仲良くしている仲間同士でグループをつくらせ、学習を進めることは良いことだと考える教師もいる。こうしたことから、理科をはじめとした教科の学習を進めるためのグループ編成においても、インフォーマル集団をもとにしたグループ編成が行われることがある。

しかし、遠足や社会見学、さらには教科の学習を進めるグループ活動の場面は、友達をつくる切っ掛けになる場面でもある。インフォーマル集団をもとにしたグループ編成をこうした場面で行うことは、

子どもたちが友達をつくる機会を失わせることになるのではないだろうか。

イ 友達の必要性の減少

「遊ぶ場所がなくなってきた、遊ぶ時間がなくなってきた、遊ぶ仲間がいなくなってきた。その三無現象が、子どもたちの外遊びを阻害し、それが室内でのテレビゲームを、今日のように流行らせた最大の要因」と野上（1993）が述べているように、子どもたちの遊びは変化してきた。子どもたちの遊びの変化は、子どもたちの「友達をつくる力」にどのような変化をもたらしたのだろうか。

浜崎（1995）は、「現代の子どもの遊びは、戸外遊びの時代から室内遊びの時代へと変化してきている。」と述べ、テレビゲームなどで遊ぶ単独型の遊びが子どもたちの間に普及していることを指摘している。さらに、岡田（1990）が、「テレビ・ビデオやテレビゲームの普及、電話の普及、優しい親のいる居心地のよい家庭など、子どもたちが学校以外で生身のともだちをもたない生活がむしろあたりまえといえるほどである。」と指摘しているように、遊びの変化は、子どもたちが友達をつくる必要性を減少させた。友達をつくる必要性が減少したということは、友達をつくらうとする子どもたちの気持ちを弱めることになる。子どもたちの遊びのこうした変化が、「友達をつくる力」を弱めた一因になったと考えられる。

(2) 「もめ事解決力」の低下

子どもたちは、学校の休み時間や登下校時、頻繁にインフォーマル集団ごとに集まり話をしている。こうした話し合いの目的は多くの場合、自分たちのインフォーマル集団の存在を集団の内外に誇示し、集団成員の情緒的なつながりを互いに示すことである。従って、インフォーマル集団の成員間に葛藤を生じるような問題を話題にすることは少ない。むしろ、インフォーマル集団の他の成員が、どのような発言を自分に求めているのかを絶えず意識し、それに合った発言をしようとしているようにさえ感じられる。インフォーマル集団内で起きた問題を、こうした話し合いで解決することは難しい。

インフォーマル集団内で起きた問題を解決する「もめ事解決力」が育たない原因として、遊び場面で生じる問題の切実感の低下と、異年齢の子どもたちが交流する機会の減少が考えられる。

ア 遊び場面で生じる問題の切実感の低下

「友人の結合は『話があうから』なのであり、遊戯による結合ではなくなった。つまり遊戯をするために集団を構成するのではなく、集団を構成してから遊戯をするのである。」と住田（1985）が述べているように、やってみたい遊びがあるから子どもたちは集団をつくるのではない。みんなでやってみたい遊びがあり、その遊びをするために集まった子どもたちが遊んでいる場面は、話が合う仲間が集まって遊んでいる場面に比べ、もめ事が起きやすい。さらに、みんながやってみたい遊びがあり、その遊びをするために集まった子どもたちにとって、遊びの中で起きた問題は是が非でも解決しなくてはならない問題である。子どもたちは、その遊びをしたいが故に集まったのであり、自分たちが直面している問題を解決しないことには、遊び続けることができないのだから、問題を解決することに切実感がある。こうした切実感のある問題を解決する体験が「もめ事解決力」を育てる体験になる。ところが、インフォーマル集団の成員だけで遊ぶ場合には、遊びの中で問題が起きても、問題を解決しなくてはならないという切実感は乏しい。むしろ、遊びの中で起きた問題が、インフォーマル集団内の人間関係に悪い影響を与えないようにすることの方が、子どもたちにとっては切実な問題となる。こうしたことから、遊ぶことに対する子どもたちの意識の変化が、「もめ事解決力」を低下させる一因になったと考えられる。

イ 異年齢交流の減少

「一昔前、子どもたちが戸外で群れてあそんでいるのは、異年齢の子ども集団が普通だった。」と河合（1990）は述べ、そうした異年齢の集団の中に役割分化がみられることを指摘している。こうした異年齢集団における年長者の役割について、蘭（1992）は「異年齢集団において年長児であることは、年少児にとって世話する人、報酬を与える人、モデリングの対象となる人である。すなわち年長児は、そ

の集団における課題達成的な側面におけるリーダーでありモデルであり、情緒維持的な側面における援助者・養育者でもある。」と述べている。

異年齢集団での遊びが子どもたちの主要な遊びであったころ、遊びの中で起きる様々な問題は、年長者によって解決されたと考えられる。年長者が問題を解決する場面を見た年少者は、年長者の問題解決の方法をモデルとして、自分たちが年長者になったとき、集団の中で起きた問題を解決することができた。異年齢集団による遊びの形態が一般的だったころは、年長者というモデルが存在し、インフォーマル集団内で起きるもめ事の解決の仕方を、子どもたちはモデリングにより学ぶことができた。しかし、室内での単独型の遊びが子どもたちの主な遊びの形態に成りつつある今、子どもたちは、インフォーマル集団内で起きるもめ事の解決の仕方を学ぶ場を失ってしまったのではないだろうか。

文 献

- 蘭 千壽 1992 対人関係のつまずき 木下芳子(編) 対人関係と社会性の発達(新・児童心理学講座8) 金子書房 Pp.261-295.
- Feshbach, N., & Sones, G. 1971 Sex differences in adolescent reactions toward newcomers. *Developmental Psychology*, 4, 381-386.
- 浜崎隆司 1995 子どもの遊びと社会性の発達 二宮克美・繁多 進(執筆代表) たくましい社会性を育てる 有斐閣 Pp.37-49.
- 河井芳文 1985 ソシオメトリー入門 みずうみ書房
- 河合雅雄 1990 子どもと自然 岩波新書
- 久保真人 1993 行動特性からみた関係の親密さ — RCIの妥当性と限界— 実験社会心理学研究, 33, 1-10.
- 三島浩路 1994 友達・親友の人数を規定する要因についての報告 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 150-151.
- 三島浩路 1995 インフォーマル集団内外での児童の呼ばれ方の違い 日本グループ・ダイナミックス学会第43回大会発表論文集, 68-69.
- 野上 暁 1993 ファミコン時代の子どもたち (ブックレット生きる7) アドバンテージサーバー
- 岡田守弘 1990 ともだちができない子どもたち ころの科学, 32, 27-31. 日本評論社
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心 — 攻撃性の社会心理学 — (セレクション社会心理学9) サイエンス社
- Peplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.) 1982 *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: Wiley. (加藤義明監訳 1988 孤独感の心理学 誠信書房)
- 住田正樹 1985 子どもの仲間集団と地域社会 九州大学出版会
- 遠西昭寿・伊藤聡子・円谷秀雄・高橋忠雄 1983 理科実験学習におけるグループ編成とその効果(1)— ソシオメトリックなグループ構成について— 日本教科教育学会誌, 8, 9-20.
- Winstead, B. A. 1986 Sex differences in same-sex friendships. In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York: Springer-Verlag. Pp. 81-99.
- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34, 105-115.